

学びの源泉 三谷 宏治

第 47 号 ヒマと貧乏とお手伝い：お手伝い編

#「お手伝い」は就職に、学力に、正義感に効く！

「ヒマと貧乏とお手伝い」と題して、講演をしている。対象は、子どもの親たち。

先週は福井県鯖江市の K 小学校で約 1 時間お話しした。

福井は日本有数の共働き地域。でも平日にも拘わらず、多くの保護者（お母さん中心）が出席された。全家庭の 4 割くらいか。

「発想力や決める力を、子どもの頃から養っていかないと、社会人になってから困ります」

「そのためには子どもたちに『ヒマと貧乏とお手伝い』を与えなくては、いけません」

一言で言えばそんなお話しを、いろいろな事例や調査結果を交えて語っていく。

例えばお手伝い。

・お手伝い経験の少ない・無い者は、段取りが悪い、気が利かない（某社人事部長）

・お手伝いをよくする子どもの正義感・道徳観は「非常に強い」。逆に、ほとんどしない子どもでは「まったくない」「あまりない」が 6 割を占める（文科学調査）

・身の回りのことを自分でしている子の学力は高い。問題解決能力では、している子の正答率が 66% に対し、しない子では 44%（東京都調査）

つまり、子どもたちの将来のためだけでなく、今の学力や性格の形成においても、お手伝いは重要なのだ。

面白いのは、こういった学力や正義感・道徳観といったものと、他の生活習慣（TV を見る、ゲームをする、スポーツクラブに入る等）との相関があまりないことだ。

TV を見ても見なくても、それだけでその子どもの学力や正義感・道徳観は変わらない。でもお手伝いをする子の学力は高く、正義感は強い。

#なぜ今の親は、子どもに「お手伝い」をさせないのか

なのに、今の親たちは（自分たちがさんざんお手伝いをさせられてきたにも拘わらず）、子どもたちに家事や家業の手伝いをさせることに、それほど熱心ではない。

「家の手伝い」をふだん「よくやる」と答えた子どもの比率は、小学生でわずか 31.5%、3 人に 1 人弱だ。しかも中学生では 17.9%、高校生では 13.8%と激減する。（ベネッセ調査）

親側に聞いても「子どもに家事をやらせているか」に対して「かなり心がけている」は 12.1%、「あまり・まったく心がけていない」が 43.4%となる。（長岡市調査）

一体なぜなのだろうか。

それは「面倒」だからだ。

親たちは、お手伝いの効用に気がついていないわけではない。我が身を振り返り「子どもの頃のお手伝い経験が、今の自分に生きている」と感じる親は多い。「お手伝いが嫌だったから、どう素早くやるかいろいろ工夫をした」という人もいる。

でも、我が子にお手伝いをさせることには積極的になれない。

K小学校でのアンケートコメントから拾ってみよう。こんな声がいっぱい出てくる。

「子どもが勉強や部活で忙しすぎる」

「自分でやってしまった方が早い」

「子どもがやるのを見守るのは手間がかかる」

「子どもに文句を言われるのがイヤ」

子どもの忙しさ、自分の忙しさ、そこからくる余裕のなさが、お手伝いという人生修行の場を、子どもから奪ってしまっている。

だから、前提は親子の「時間の余裕」「心の余裕」ではある。これが無くてはお手伝い重視は貫けない。ただ、それだけでも足りない。

必要なのは「多少の学力より、習い事より、将来役に立つのはお手伝い経験だ」「だから、例えば今、子どもに嫌われようとお手伝いをさせる」という強い意思なのだ。

「お手伝いが先。マンガやゲームはもちろん、宿題も後」と言えるのか。

「お手伝いが終わっていないなら、学校にすら行かなくて良い・行かせない」と言えるのか。

『お手伝い至上主義』実現の前提は…

品川区A地区の小学校PTA役員研修にお邪魔した。そのときのメインテーマは「決める力」

『サイバイル』などのケースディスカッションを通じて、決める力の大事さや、ワザを体感しようとする内容だ。1時間以上にわたり、熱いディスカッションを繰り広げて頂いた。

それに絡めて、お手伝い至上主義についても語った。我が家での実践事例も含めて。

「他の家は関係ない。区外に通う高校生と云えど、携帯電話も無条件では認めない。お手伝いが出来ていなければ（携帯所持の）申請は門前払い」云々。

研修の最後に、参加者からの質問を受けた。

その一つが、「奥様との馴れ初めは？」というもの。ん？ なぜにそんな質問が、と思ったが、よく聞いてみると要はこういうことだったようだ。

「子どもに相当無茶をやっているが、お父さんの暴走ではないか」

「お母さんはちゃんと納得してやっているのか」

「結局、お母さんが現場で苦しんでいるのではないか」

もちろん女性陣からの質問だったのだが、それに答えつつ思った。

「父親の育児参画、か…」

父親が参画すればうまく行く、というわけでは決していない。でも、母親だけで難しいことも、両親の共同戦線であれば可能になるかもしれない。

夫唱婦随、でも、婦唱夫随でも構わない。夫婦だけでなく、その親（ジジババ）たちとの共同戦線もあり得るだろう。

但し、戦線を広げず、一点突破を図ることをお勧めする。その一点は「お手伝い」

子どもたちに家事・家業のお手伝いを、ファーストプライオリティとしてやらせることは「親のやっていることが一番大事」と伝えることでもある。そこから自然と、親への感謝・尊敬も生まれていくのだろう。

お手伝い至上主義の実現。その一点に、お父さん
方、どう貢献しますか。

参考：長岡市「家庭で子どもに手伝いをさせよう運動」

[http://www.city.nagaoka.niigata.jp/kurashi/kosodate/
help.html](http://www.city.nagaoka.niigata.jp/kurashi/kosodate/help.html)

初出：CAREERINQ. 2008/12/15